

(第3種郵便物認可)

サイ・テク 知と技の発信

【489】

埼玉大学・理工学研究の現場

以下は、定年を半年に控えた、老教授の回顧談という種類の文書である。

40年前、「本Powers of Ten (Philip Morris他 Scientific American Library)を買った。銀河▽太陽系▽地球▽人間▽分子▽原子という具合に、10倍ずつサイズを変えた写真集である。自然は、10の40乗の森羅万象である」と実感できた。宇宙は、130億年前に虚空の中ではつかり生まれたという。この途方もない時間と空間の広がり、自然科学の対象である。森羅万象を、1人の頭でイメージすることは、できるはずもないので、自然科学の対象は、森羅万象のカケラになる。自分は、表面に関心のある化学者である

が、分子や原子の振る舞いから表面で起る現象を眺めてきた。化学は、電子が支配していて、電子の踊る舞台を分子や原子が作る。化学者は(恐らく他の分野でも)、大学院入学22歳から退職65歳まで、50年くらい研究に精を出す。この間、電子は常に興味を中心であつた。ところが、友達である核物理学者に「電子は、原子核の周りにたかる蠅みたいなモノ」と言われた事を思い出す。この人とは、30年前の3年の間(大学院の博士課程を修了して結婚するまでの間)、ほぼ毎日、酒を呑んで、話をしていた。研究の話もしたはずだけれども、記憶に残っているのは、駆け出し学者の意欲と不安。世間と隔絶した大学院で、夢中や

自然・自然科学・自然科学者

中林 誠一郎 教授



なかばやし・せいいちろう 1956年
生まれ。東大工院博士 理研研究員
北大理学部助教授を経て現職

ればやるほど判らないことが増えるばかり)に過ぎ、30歳を前にして最初の職にありついたら、たつた。

「科学の論文には、形容詞があるのか?」と、最近、文系の友人に聞かれた。自然には、義理も人情もないが、自然科学者は、切れば血の出る人間だから、研究の現場は、卑怯や怠惰、勇気や友情、羨望や絶望にまみれた泥臭い世界である。今、友人や先輩、師匠の言っていた言葉が、味わい深く思ひ出される。大学院時代のボスの言葉。「老教授に廊下であつて挨拶しても、無視される」ことがある。これは、威張っているわけでも何でもなくて、老化によって視野が狭くなった結果なので、気にすることはない。「先生一流の冗談だ」と思ったが、最近その真意を実感することがある。

学者は、30歳前後は、ドングリの背比べだけれども、時を経て、業績も人間も大きく分化するのが面白い。最近、藤永茂先生の近著を読んで、仰天した。「オベ・おかもめ Kindle版小説(2017)」。藤永先生には、一面識もないけれども、高名な量子化学者で1970年にカナダに移られた。「アメリカインディアン悲史」など多数の著作がある。大学紛争中から海外なので、「時代の思想」が良い意味で保存されている。「おかもめ」は、91歳の初小説。ダビンチ級の天才科学者・テロリスト白鳥老教授と美女(?)ジャンヌの、強者の傲慢と搾取に対する怒り。人はいかに生き、なにと戦つべきなのかを問う衝撃作。自分には、到達できそこもない「老いてなお」という未踏峰を仰ぐ感じで、力が湧いた。